

尾本彰氏(前東京電力原子力技術部長)

自ら希望し、国際原子力機関(IAEA)原子力発電部長に転出

(原子力 eye2004年3月号「eye 広場」より転載)

東京電力の原子力技術部門を背負うホープとして期待されていた原子力技術開発本部副本部長・技術部長の尾本彰氏が、国際原子力機関(IAEA)の原子力発電部長に転出するため、1月3日に離日した。尾本氏は、かねてから海外に出て国際的な場で活動したいという強い希望を抱いていた。勝俣恒久東電社長は、「東電としては大変残念だが、国際的にはばたいてもらうこともまた日本にとって大事であり、いずれ東電に戻ってもらうこともあり得る」と、前向きに受け止め、休職扱いになっている。



尾本氏は東京大学工学部原子力工学科を卒業、東電に入社し、主として原子炉の安全設計・安全解析や設備設計畑を歩き、原子力部門を担う要の1人と見られてきた。ただ、ワシントン事務所での米国駐在経験や経済協力開発機構/原子力機関(OECD/NEA)やIAEA等の委員としての活動を通じて海外経験が豊富で人脈も広く、「海外で仕事をしたい」との思いも強かった。

IAEAでの役割について尾本氏は、「既存の軽水炉がより効率的かつ(他電源に比べ)競争力を持てるように、きちっとした将来計画を策定することが第一の任務。また、IAEAは発展途上国支援など、日本だけでなく世界のメンバー国全体に貢献する責務を負っている。特に今後、原子力は発電技術のみならず、核不拡散等、平和利用に徹した国際的枠組み作りが一段と重要になってくる」と、抱負と見通しを語った。

IAEAは、核物質の監視と原子力開発の推進という2つの役割を担う原子力平和利用の国際的番人。日本人で部長以上の現職は、原子力安全局事務次長の谷口富裕氏、保障措置局実施部長の村上憲治氏の2人。今回、尾本氏が原子力エネルギー局原子力発電部長に就任することで、エルパラダイ事務局長の下、6局体制のうち3局の主要ポストを占めることになり、横の連絡を密に、かつてない充実した布陣が実現、日本の重みが増すと期待される。

わが国はIAEAのような国際機関に従来、金は出すが人的貢献が薄いことが指摘されてきた。また、最近では日本国内からも資金協力をふさわしい国際機関の活用を求める声が高まっている。それだけに、尾本氏のような人材が自らの強い意志でIAEAの舞台に立つことは国内外両面から意義が大きい。

しかし、わが国の原子力界にとっては痛手である。近藤駿介東大大学院教授が原子力委員長に就任、先の東電問題では榎本聡明副社長が引責辞任(現海外電力調査会長)するなど、エース級が相次いで実務部隊から抜けている。それだけに、国内での原子力が危急存亡のときを迎える今、次代を担うと期待された尾本氏の海外転出は、東電のみならず、国内原子力界にとっても大きなマイナス、という不安の声も聞かれる。

なお、尾本氏には、本誌「原子力 eye」5月号から3ヵ月ごとに「from IAEA」のタイトルで寄稿、今後一段と重要性を増す「世界の風」を吹き込んでいただきます。ご期待下さい。